

半歩遅れの

読書術

森本 あんり



あれは大学2年の夏だったと

思う。大学食堂のテーブルを囲んで、小さな群れができていた。

中心にむっくりとした初老の人

がいたが、それが森有正だと聞

かされても、わたしにはあまり

興味が湧かなかった。森有正と

いうのは、自分が読み続けている

本を書いた人の名前であっ

て、その著者を個人的に知りた

いとは思わなかった。秋学期に

は授業を出すとのことだった

が、その秋までの短い間に彼は

パリで逝ってしまったので、結

局直接会うことはなかった。

深い森の中で湖の底に潜った

ような気持ち。薄明の中で息を

しようともがくが、手足がスロ

ーモーションのようにしか動か

ない。水を通してくぐもった声

が聞こえてくる。何を言ってい

るのかよくわからないのだが、

それをきちんと聞き分けな

いと、やがて自分は暗黒の底に沈

んでしまうのではないか。だか

ら必死にそれを理解しようとも

がき続ける——森有正を読むと

いうことは、わたしにとってそ

んな行為だった。なぜそんな

森有正を読むということ

その声を聞く 深い湖の底で

かはわからない。ちょうど20歳くらいで、思索の深みや味わいを知り始めた頃だった。「経験」や「促し」という彼の言葉は、自分の生を解釈するのに必須の語彙となった。

その中で出会ったのが『ドストエーフスキー覚書』（森有正著・筑摩書房）である。ちょうどドストエーフスキーにはまっていた頃だが、わたしが衝撃を受けたのは、小説とは無関係の最初の一頁だった。「キリスト教

は人間の罪を明らかにし、かつその罪からの救いを教えるが、それは人間を倫理的責任のある主体として規定することである」と同時に、人間がその責任を担い得ない存在であることを断言している。この2つが交差する一点に、わたしは今もとらえられたままである。

森有正のことは、本人と親交のあった多くの人が書いている。エピソードの多い人だったようだが、それにもあまり関心がない。森有正を読むということとは、結局そこに書かれたことを自分の個の内面に構築し直すことなのだ。好きな小説の映画化を見に行くと必ず幻滅を感じるのと同じで、他人の構築した森有正世界は、畢竟わたしには響いてこない。

振り返ってみると、森有正を読んでいたのはわたしの年代までのような気がする。今の学生たちは、自分の人生に決定的な影響を与える本の一節に出会う、などという経験をすることがあるのだろうか。

（神学者）